

川越俳諧史発掘

内野 勝裕

小江戸とも江戸の母とも称えられた川越、江戸文化を代表する俳諧は当然ながら川越にも華開いた。現在知りうる最も古い川越の俳人、壺瓢軒岸本調和編『富士石』に入集する加藤吉勝、加藤信易等がある。『富士石』は、延宝七年(一六七九)四月の刊行で、桃青(芭蕉)一派が台頭しつつある頃、江戸俳壇で最大の勢力を誇る調和によって編まれた撰集である。

少しく素性を知ることが可能な初期の俳人としては、元禄十五年(一七〇二)刊、立羽不角編『入間川やらずの雨』に登場する朋角がいる。朋角は、『武蔵三芳野名勝図会』の記載等から、柳沢吉保の家臣で濯紫園(唯心庵)の庵主でもあった山東小市郎であろうと言われている(『本の中の川越』山野清二郎著)。

続いてやや古いところでは、享保七年(一七二二)刊、沾徳・沾洲門の貞休(のち識月、露月と改号)編『俳度曲』の入集者に、川越・酒井甫洲、持田疎影、新井雨声、加藤巴峽、寺嶋守黒等がいる。しかし、これらの川越の初期俳人については、川越藩士あるいは富裕な川越商人であったらうと推察されるものの、その詳しい経歴を知ることができない。

また、宝暦九年(一七五九)庭に鶴が巣を営んだのを祝って『鶴の屋どり』という小冊を刊行したみよし野の俳人遊鶴巢仙桂が、最近『関東俳諧叢書』第二十六巻に紹介されて、にわか注目を集めている。仙桂は木屋庵谷口楼川の門人で大野氏、川越喜多町に広大な屋敷を所有していた大野九兵衛(寛政二年、喜多町屋敷西側絵図面)ではないかと推察されるが、今のところ確証が得られない。

遊鶴巢 仙桂

師の谷口楼川は、城下町川越の繁栄ぶりと弟子の新号を祝して、次のように詠んでいる。

あしたには五穀の市人たへず
ゆふべには三斛の友に富る、
みよし野や大野何がしが新号
を賀して

木犀庵

ところで、本稿では、芭蕉の門人であった高山麁時や『武蔵三芳野名勝図会』の編者でもある校斎其馨(中島孝昌)のような比較的良好に知られた川越俳人(墓はいずれも埼玉県指定文化財)を除いて

いる。また古くから知られている墨池庵尾海(松本利紀・行伝寺に墓が現存)、『面白史話』所収)や『埼玉史談』等で最近研究が進んだ老樹翁貞陸(藤田佐助・川越藩士・元町の大蓮寺に墓が現存)名月堂連国(板倉善左衛門良矩・川越藩士・地誌『川越素麴』の編者)時雨庵麦鴉(鹿子田維清・川越藩士・志多町の東明寺に墓が現存)天爵履仁(江戸の漢学者・伊藤恒庵)等も別稿を参照されたい。

(1) 高山嵐阜

前述の麁時の男である。川越における俳諧活動としてはむしろ父以上に顕彰されてしかるべきであろう。嵐阜は高山伝右衛門繁扶、川越藩主秋元但馬守喬房の家老で、延享五年(一七四八)六月二日、七十三歳で没した。父の麁時と同じく川越石原町の長久山本応寺に墓が現存するが、無縁仏の一群に置かれているのは、極めて残念である。



高山嵐阜の墓(本応寺)

享保二十年(一七三五)白兔園中川宗瑞が川越へ旅した折の記念集『松の宴』に、嵐阜亭で「芭蕉の翁より伝へ置かれた松風の文づくえ」を見たという一文も見える。また、自在庵仲祇徳も「三芳野句稿」(『関東俳諧叢書』所収)の旅で、川越を訪れて高山家の「松風の文台」を詠んでいるから、川

越のこの芭蕉ゆかりの品は、俳諧師には、垂涎の的であったのだろう。

それにしても、先の貞陸や連国も秋元氏の家臣、川越の地誌『多濃武の雁』の編者太陽寺盛胤しかり、同家には風雅の士が多かったことに驚く。

嵐阜の句は、宗瑞の追善集『翌のたのむ』(延享元年刊)等の句集に名を見る。

野辺をくり案山子も
笠をうつむけり 嵐阜

錢別(『松の宴』)
蓮の露玉とあざむく土産かな 嵐阜

(2) 水村祇肖
自在庵祇徳に入門した水村祇肖は、寛延三年(一七五〇)に改号披露記念集『花ごころ』(仮題)を出版している。



水村祇肖の墓(後列左端、本応寺)

春駒の狂ひ場もよしすみれ艸
祇肖

祇肖は、初号香飛、前号を素水と言ひ、「三芳野のさとの長」であったというから、川越の町年寄のことであろう。町年寄は町役人中の最高の身分で、江戸時代を通じて二名であった(幕末期になると一名増員)。元禄八年(一六九五)ころ以降、嘉永元年(一八四八)まで本町居住の加茂下与一右衛門家と高沢町居住の水村甚左衛門家が世襲的にこれを勤めていたのである。川越十ヶ町名主の喜多町名主水村与右衛門家は、寛文年間に甚

左衛門から分家した家である。したがって、祇肖は、水村甚左衛門家の一人といつて間違ひなく、ほとんど特定できる。水村家の菩提寺は、石原町の日蓮宗本応寺で甚左衛門家の歴代の墓石が現存する。この中、祇肖に該当する墓石は、宝暦七年(一七五七)六月二十四日に没した妙法心行院惠鏡日研居士で、実名は水村甚左衛門忠寛であるとと思われる。

祇肖の主な入集句には、次のようなものがある。
宝暦二年(一七五二)二月刊、祇徳編『昔朝八百五十年』
富士も今朝笑ひ見せけり初霞
川越 祇肖

同年秋、川越住牛渚(宗瑞門)の伊勢参宮記念集『二見行』錢別
色も香もやがて都の桜かな
祇肖

宝暦四年(一七四五)春刊、梵薩・仏因編『草庵式』(祇徳一門春帖)
明てなを梅も薫るや三ツの朝
川越 祇肖

同年十一月二十四日に五十三歳で没した師祇徳の追善集『追善もと来し道』
師の恩のいよいよ高し峰の雪
祇肖

同年冬刊、鶏口編『鄙の綾』
茅葺に拍子のぬけるあられかな
川越 祇肖

(3) 梅曉堂盤雨
梅曉堂盤雨は、川越市指定文化財『川越の四季屏風』(紙本着色・八曲一双)の作者として夙に有名である。盤雨は高沢町(現元町二丁目)の町名主、井上権兵衛包鏡(幼名与七郎、長じて助左衛門)のことと、先祖が丹波国篠山から川越に移り住んだことから丹波屋と称して、家は代々材木や米穀等を

商う豪商であった。



井上盤雨の墓(法善寺)

梅曉堂盤雨の墓は、鍛冶町(現幸町)の浄土真宗自然山法善寺にある。法名が崇峻院積單山盤雨居士、安永八年(一七七九)二月二日に七十歳で没している。墓の右側面には、盤雨の和歌が刻まれている。盤雨の多芸ぶりが偲ばれるのである。

辞世 井包貌

世の中は知らねど法の花咲ぬ
しかし、今まで盤雨が、川越を代表する俳人の一人であることは、ほとんど知られていなかった。

俳諧では初め祇徳に親しんだようである。祇徳は『三芳野句稿』の旅で梅曉亭も訪れ、句を残している。ところが、やがて東武獅子門の五竹坊(美濃派四世)の高弟で師範代とも言うべき安田以哉坊(雪炊庵二狂)と交流するようになる。宝暦五年(一七五五)刊、雪炊庵二狂編『葛の別』には、次のような長い前書きを持つ句が入集する。

雪炊庵の主人此地に杖をとどめられて老師の正道をしたしく伝え給ひなを暫の恵みも百年の因を重ねたる思ひに今又帰郷の名残をおしみて
わすられじ竹の林の下すずみ

梅曉堂 盤雨

他に次の撰集にも入集を見る。

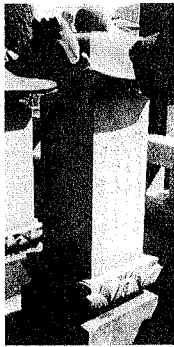
宝暦九年刊、仙桂編『鶴の屋どり』
鶴の舞ふ空や長閑に行末も

盤雨

宝暦十二年(一七六二)刊、以哉坊編『むしの野』
すずむしや井木に星も明残り

(4)有隣舎水徳
川越で、俳諧古学門を称した祇徳に入門したのは、水徳が最も早いものである。俳号も当然師の号に因んだものであろう。水徳は、鍛冶町の名主中島与兵衛真形の子とで、中島孝昌の父である。今まで孝昌の陰であり目立たない存在であったが、実はなかなかの俳人なのである。孝昌にも大きな影響を与えたものと思われる。

祇徳の延享三年(一七四六)の歳旦帖『除元吟囊』に早くも入集している。時に水徳は、まだ弱冠二十歳の青年であった。初霞句ふや窓のさくら炭 水徳 中島水徳の墓は、喜多町の曹洞宗青鷹山広濟寺にあり、右側面に次のように刻まれている。



中島水徳の墓(広濟寺)

中嶋與兵衛真形字水徳
行年五十二歳卒
維時安永七戌戌年正月十三日

孝子 中島徳三郎孝昌建

安永七年(一七七八)、水徳は五十二歳の若さで没している。水徳の句には、次のようなものがある。宝暦二年(一七五二)刊、祇徳編『昔廟八百五十年』
裏不二やまだ足らぬ初霞

川越 水徳

手を組んで咄す苦はなし年の暮

武州川越連 水徳

同四年刊、梵薩・仏因編『草庵式』

元日やしらべ代らぬ松の声

川越連 水徳
世の世話に梅もさし出て
年くれぬ 水徳

同年刊、『追悼もと来し道』
花もなきせめて手向ん枝のゆき

川越 水徳

享和元年(一八〇一)序『武蔵三芳野名勝図会』永川社
いや高き神も和光の桜かな

中島氏 水徳

(5)悠然舎巴菊
現在でも城下町川越を象徴するものに時の鐘がある。『武蔵三芳野名勝図会』(筋野家本)で墨池庵四世松本藻彦が描くところの時の鐘の挿絵は、ご覧になった方も多いためであろう。この挿絵に添えられた句の作者が巴菊である。

横雲に鐘をさそふやほととぎす
悠然舎 巴菊

巴菊は前述の盤雨の孫と考えられ、井上勘兵衛信齋がフルネームである。やはり高沢町の名主を勤めた。『武蔵三芳野名勝図会』には、『六丘神祠記』ハ寛政五癸巳年、高沢町之里正井上信齋之応需、青陵阜鶴之撰也』の記事も見える。中島孝昌同様、時の漢学者(経済学者)海保青陵と交流があったものと思われる。法善寺にある墓によると、巴菊は文政二年(一八一九)七月十六日に六十三歳で没している。墓石右側面には、

葛の葉のそらあたりか
今朝の秋 巴菊

今朝の秋 巴菊

井上巴菊の墓(法善寺)

の句が刻まれている。

俳諧は、履仁の影響を強く受けたようである。次の撰集等に句が見える。

天明三年(一七八三)春刊、履仁編『金蘭集』
片枝は井へこぼしけり梅の花

天明六年正月刊、履仁編『朝みどり』
磨ばや玉の春なる初手洗 巴菊
誰吹て鶯笛の声すらん 巴菊
大なる年棚清し七五三筋 巴菊

『武蔵三芳野名勝図会』
初校知る人得たるころかな 巴菊

これまで五人の川越俳人の略歴や管見する入集句を紹介してきた。いずれも川越の支配者層である家老、町年寄、町名主といった顔触れとなつてしまった。時代も十八世紀の後半に集中している。俳諧が真に庶民の文学となるのは、十九世紀に入つて以降のことである。しかも、川越の俳人達に影響を与えた江戸の宗匠達については、その流派の特徴や詳しい経歴等にふれることができなかった。とにかく、これは川越俳諧史のほんの一端に過ぎない。まだまだ俳名のみで、その実像を明らかにすることができない数倍する川越俳人が存在する。幕末・明治期の俳人には、肖像や実名まで分かりながら詳しい調査ができていない人物もいる。また、近年川越市に合併した城下町川越周辺の村々の俳人についてもここでは取り上げていない。

それにしても、川越街道や新河岸川の舟運で結ばれた江戸と川越は、文人墨客の往来もはげしくて、実に江戸文化は隆盛を極めた。中でも俳諧は連衆(地域同好者)が

集まつて連句を詠む座の文学(文芸共同体)の特徴を持つ。そこは社交の場であり、情報交換の場であった。何より俳諧の座では身分社会であった江戸時代において唯一の平等な人間の交わり人間解放の場でもあった。本稿で言えば、祇徳宗匠(江戸蔵前の札差出身)の下で、嵐阜、祇肖、盤雨、水徳は連衆を形成していたのである。

また、俳諧を嗜むには漢学や日本古典文学等さまざまな教養が必要であった。俳諧の享受は、地域の指導者にとっては、ステータスシンボルであったし、庶民や子供達には初等教育の役割も果たしていたのである。

彼らが詠んだ句の評価も当然重要なことであるが、今は一人でも多くの川越俳人を発掘していくことが、急務と考える。とりあえず川越俳人の全体像把握にいかにか近づけるかが第一目標である。それが他の江戸文化との関連や川越の江戸文化史の解明に少しでも役立てば幸いである。

《参考文献》
『俳文学大辞典』角川書店
『関東俳諧叢書』第六巻・第二十三巻・第二十六巻他(加藤定彦・外村展子編)
『埼玉史談』三六一三・三七一二・四九一二他
『川越市史』第三巻・近世編
『川越の文化財』(川越市文化財保護協会)
『川越市の文化財』(川越市教育委員会)
『町割から都市計画へ』絵地図でみる川越の都市形成史(川越市立博物館)
拙著『埼玉俳諧人名辞典』(高一六回)